

こんなん しています。

わだいのこうん

住民のほとんどが高齢者

過疎が進行した地区において、高齢化の問題は高齢者だけで核家族化し、日常生活がままならない状況に至る点にあります。そこで、山村の高齢者の生活実態調査を行いました。対象は、和歌山県南部の、役場のある町から車で1時間も離れた山あいの70戸ほどの集落。一緒に調査したのは、筆者と信愛女子短期大学の吉田先生と山東先生。集落の全戸を尋ね一人ひとりに聞き取り調査を行いました。

日本の高齢化率は25%

を超え、和歌山県は全国で5番目くらいの高齢化率。紀南地域には高齢化率40%を超える町村があり、集落単位で見れば80%を超えるところもあります。住民のほとんどが65歳以上ということになります。高齢化率40%を超えるこれらの町村では、住民の3人に1人が75歳以上の後期高齢者になっています。

現在では、65歳はまだまだ壮年。会社を停年になっても、たとえば農業では田熟期といえるほどの頼りになる年代。しかし後期高齢者となると健康状態に不安も出、家

生きること、暮らすこと

むらの風景



食べる」。高齢や一人暮らしになると、欠食傾向があるのではないかと質問事項に入れたのです。欠食は生活の乱れにつながります。

しかし、この質問はよい意味で裏切られました。質問に「なんて当たり前前のことを聞くだ」との表情をされたほど。ある高齢者夫婦の一日はこうでした。5時起床、朝ご飯を食べる、40分の散歩、農作業や家事、11時昼食、農作業や家事、5時夕食、夜のひとときに自家産の温かいハチミツドリンクを飲む、就寝…。この日常が規則正しく繰り返されています。そして家のそばには丹念に手入れされた田畑があり、倉庫には農具や木工具など。

そこで見たのは、自己を律した自立の日常でした。よくある、高齢山村は生活に困窮している、という偏った思い込みは間違いです。高齢山村は多くの危機を内包してはいるけれど、それをしのご自立の姿を調査のたびに確認します。

日の出とともに起き、日暮れとともに寝ることに。農作業で身体を動かしているのに、それでも散歩をして集落を毎日歩きめぐること。斜面に棚田を作り、むらの土を踏みしめ、米を作り菜を植え、そして食事をする。

手入れされた田



台に立つと、川を挟んで斜面に家々が軒を並べ、棚田が構成され、神社と寺があり、いまは廃校ですが学校がある、そんなひとかたまりの集落がひと目で分かります。新しい外からの資本にほとんど浸食されていない、このひとかたまりの集落そのものも、いまでは貴重な、奇跡のむらのように見えました。

人間の生存とは「暮らし」そのものなんだ、とあらためて実感した調査でした。飽食と昼夜の節目なく流れる一日に慣れきった身には、このむらの現実には驚きでした。高か。

奇跡のむら

調査では大きな傾向が聞き取れました。印象的な1点は「3食きちんと

プロ
フィル



湯崎 真梨子(ゆざき・まりこ)

和歌山大学地域創造支援機構 特任教授、地域創造支援マネージャー。博士(学術)。専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。